

# 会津盆地南西部の平地城館跡と山城跡 —向羽黒城への前提条件—

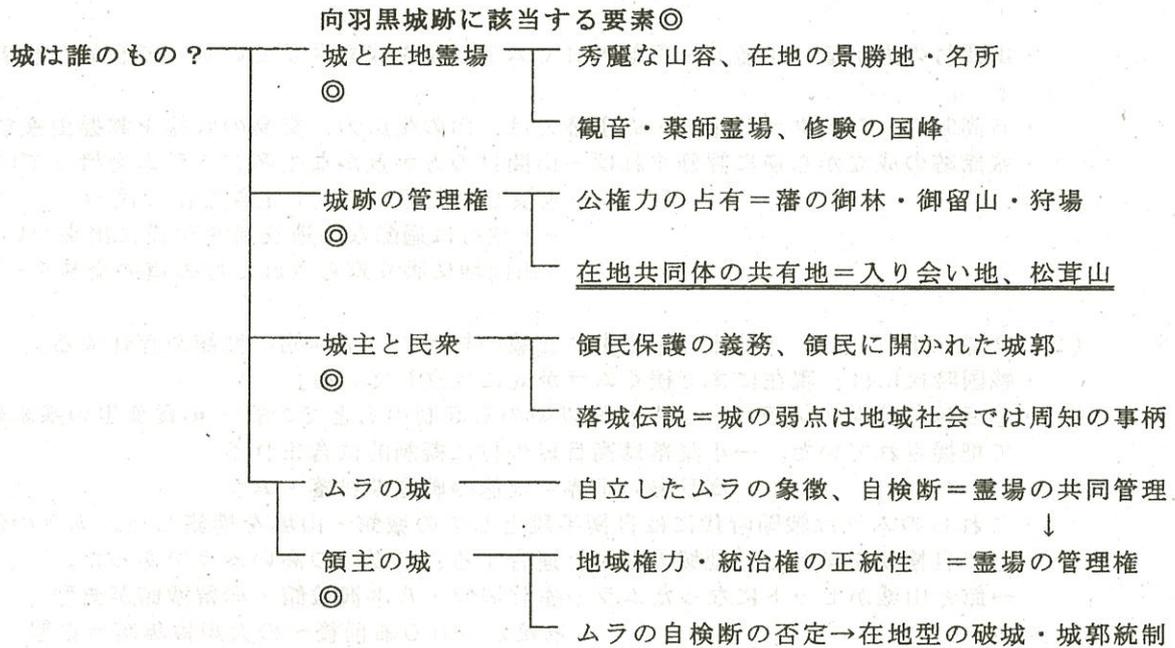
2012.03.25

鶴見大学文学部文化財学科

伊藤正義

## 一. はじめに

### 1. 城は誰のもの？



→葦名氏はムラの城を否定出来ていない→家臣団の城下集住不実現→戦国城下町の幻想  
 →家臣団の城下集住＝兵農分離→新領主・進駐軍としての豊臣・蒲生家中→非在地・在村領主  
 →旧葦名氏家臣団→税を負担する武士＝郷土身分に組織化＝税を一部免除される百姓農民  
 →近世初頭の在村領主→会津藩の郷頭、親方様

### 2. 戦国の世

中世の災害＝天災（冷害・風水害・虫害）、中世の疫病←→農業生産の後退、食料不足  
 →室町バブルの崩壊→十五世紀前半頃（東国）から中頃（西国・九州）→応仁文明の乱  
 →自立・自衛する戦国の村・町の成立→農民・住民の武装化  
 →ムラ・マチの城の成立、集落の城郭化→これらを統括する地域権力の成立  
 →戦国大名の登場 十六世紀前半までの弱い戦国大名権力→葦名氏の大名家権力  
 十六世紀後半からの強い戦国大名権力→伊達氏の大名家権力

## 二. 盆地周辺部の城館跡の特性

### 1. 石田明夫氏の『会津高田町史』第二巻「城館跡」の研究成果から

- ・会津高田町＝会津盆地南西部に位置し、盆地と南会津の山間地とを結ぶ結節点。会津総鎮守（陸奥二宮）の伊佐須美神社が鎮座する、古代文化の中心地の一つ。  
会津葦名氏の四宿老の一人、松本氏の本拠地。
- 人口約1万6千人、面積約195 km<sup>2</sup>。北東部は会津盆地の南西端に当たる農耕地帯。南部は山村部で全面積の約63%を占める。
- ・消滅したものも含めて40の城館跡を確認。グループ村落で城館遺跡不在は3箇所のみ。

(1) 近世初頭の高目録、近世初期の万改帳記載戸数・人口と城館跡の対比結果

拠点城館 = 平均	石高：2千石前後	戸数：160戸	人口：700人
城館 = 平坦地	：600石	：50戸	：380人
山間地	：100石	：30戸	：110人

※山間村と平地村との城館成立基準の差

→石高：山1 / 平6、戸数：山3 / 平5、人口：山1 / 平4

↓

・山間村の方が低い生産力・戸数人口でムラの城を成立させている（通説的な解釈）

↓

- ・石高制のマジック＝公権力・領主権力は、山の生産力、交易の収益を掌握出来ない。
- ・城館跡の成立から逆に評価すれば→山間村の方が豊かな生産システムを持っていた。
  - 他領との交易ルートで生きる山の民
  - 平地村は過酷な山道交易を生業に出来ない
  - 山間地に張り巡らされた塩の道の交易ルート

(2) 文禄三年（1594）『蒲生高目録』に記載の村々には基本的に城館が存在する。

- ・戦国時代には、現在にまで続くムラが既に成立していた。
- ・高目録に記載のムラは、太閤検地以降の石高制のもとでの役・年貢負担の基本単位として把握されていた。→小集落は高目録の村に擬制的に含まれる
  - 高目録の世界≠実態の戦国期村落・ムラ
- ・これらのムラは戦国時代には自衛手段としての城館・山城を構築した。ムラの領主とともに自検断を執行し、地域の領主と連合する、自立性の高いムラであった。
  - 館と山城がセットになったムラ→雀林城館・八木沢城館・赤留城館が典型
  - 石高が500石前後～の大規模集落＝C型

(3) 居館形態

- A：拠点城館・平地の大型居館跡—二重の堀・土塁、一辺100mを越え、大規模な土塁・虎口を構築する→権威の象徴
- B：中腹居館—集落から見上げる→居館・社寺→山城
  - ここに大きな区分がある・拠点城館
- C：一般城館—一重の堀・土塁、現在集落の外辺に占地
  - 他の城館から見える位置→館の内側＝集落→領民の安全保障
  - 集落＝イエの中の論理
- D：山城を持たない居館→平地村落のムラの城館

山城

- 秀麗な山容、集落から良く見える山に占地する
- 社寺の存在や信仰の対象の霊場・霊山。自立したムラの象徴
- 集落から見える側に防御施設を集中配置する
  - 集落から見えない部分、山城の裏側は不防備→ローコストの築城
  - 本当の籠城戦は不可能→山城の機能・目的は何か？
- 集落から見上げる、他の城館・集落から良く見える、外面の防御機能
  - 張り子の山城、攻城戦の困難性・籠城戦の優位性の誇示
  - 集落・領域・領民の安心料→避難所・山小屋籠もり
  - 神仏の宿る霊場・霊山→神仏の加護
- D：居館を持たない山城→山村のムラの城

集落（ムラ）—居館—山城

- ・ムラから見える山城＝ムラの城
- ・山城から見える領域＝支配領域
- ・居館形態＝A地域の領主＞B地区＞Cムラ＞D小規模ムラ  
 霊場管理＝A地域の霊場支配→並行して大型居館内に社寺を抱擁する  
 B地区→居館と社寺の分離。  
 C・Dムラ→居館と堂祠未分離。

※霊場・社寺＝宗教施設は、Aに行くほど領主の支配権・主催権が強くなるが、本来的なムラの共有性は否定されずに公共性・公開性が持続する。  
 「みんなのモノの管理権」＝領主の正統性につながる

2. 高田町域の中心地に偏在する平地城館跡→会津盆地は居館遺跡が多い地域の一つ  
 ○平地城館遺跡が卓越する地域

- ①新潟県佐渡地方→戦国大名が成立しない、平等均質な村殿の世界
- ②滋賀県湖北地方→脆弱な戦国大名、浅井氏の勢力基盤。在村領主の権限が強い
- ③滋賀県甲賀地方→脆弱な戦国大名、六角氏の勢力基盤。

平等均質な村殿領主連合、甲賀郡中惣一揆の世界  
 →戦国大名輩名氏の権力→自立性が強い在村領主連合の上に存立した脆弱な戦国大名権力

(1) 旧高田町域の城館跡の特徴→40の城館跡のうち22に居館が伴う  
 居館を伴う村落グループは石高が100石以上

①城館跡名 特大中核	蒲生高 目録	②城館跡名 中規模中核	高目録	③城館跡名 中規模	高目録	④城館跡名 小規模	高目録
1. 高田城	2,285	5. 八木沢城	960	13. 雀林城館	483	19. 下館	205
2. 西勝城	1,925	館		14. 安田城	451	20. 上戸原	174
3. 玉井館	1,398	6. 長岡館	882	15. 寺崎館	403	21. 落合城	164
4. 水沢城館	1,325	7. 中川館	806	16. 上中川館	375	22. 小山城	101
※		8. 杉屋城	746	17. 松岸館	306	ここが居館のボーダーライン	
		9. 永井野城	742	18. 沖ノ館	321	※4. 水沢城館は無高の9. 遅沢城10. 勝負沢城	
		10. 小川館	672	11. 入桧和田12. 城戦場城13. 結能城を含む			
		11. 藤田城館	549				
		12. 赤留城館	505				

(2) 山城のみで居館を伴わないケース→40の城館跡のうち13例  
 居館を伴わない村落グループは石高が少ない→700～0石。

- ⑤の赤館城館は特異事例？ ⑥⑦山間地の山城は居館を伴わない傾向を示す  
 →山村部では村・村人の自立性が強い→村人と城主が一体→居館が成立しにくい  
 →在村領主＝地侍→屋敷を構えるが、館（たて・たち）とは言わない

城館跡名 特大中核	蒲生高 目録	⑤城館跡名 中規模中核	高目録	⑥城館跡名 中規模	高目録	⑦城館跡名 小規模	高目録
—	—	1. 赤館城	737	2. 無量城	476	4. 市野城	297
				3. 尾岐窪城	344	5. 冑城	240
						6. 仁王城	164
⑧城館跡名 極小規模	高目録	⑨城館跡名 無高※※	高目録	※※9～13は、東尾岐村領主、水沢城館主の支配下の地侍。各山城跡は村共同の村の城。 水沢城館と9～13は山間地の戦国村落・城館の典型例。水沢城館と9～13で一つの永峯家中を構成していた。城館主の各城主・村落に対する支配権は脆弱。自立性の強い山村と村人			
7. 牧内城	36	9. 遅沢城	—				
8. 入谷ヶ城	25	10. 勝負沢城	—				
		11. 入桧和田城	—				

	12. 城戰場城	—	たち。
	13. 結能城	—	

### 3. 城館の呼び方の地域性と差異

○城館の形態分類／千田・小島・前川氏『城館調査ハンドブック』

- ①列島中央部（東北南部～九州北部）＝方形地割・やかた型城郭
- ②東北北部と九州南部＝曲輪の集合体・館屋敷型城郭
- ③北海道のチャシと館
- ④南西諸島のグスク

○形態差の由来と呼称の違い

- ①列島中央部＝方形地割・やかた型城郭→領主権力の確立→強い求心性  
公権力のシンボル＝京都（白河・鳥羽・六波羅）→平泉・鎌倉→東国の武家社会のモデル  
花の御所・管領屋敷  
↓  
「呼称・名称＝〇〇城」  
・平地方形居館群の成立→佐渡国・国仲平野の村殿領主の世界が典型

- ②曲輪の集合体・館屋敷型城郭→領主権力の連合体→弱い求心性  
東北北部＝館＋館＋館・・・＝「〇〇城」 例：青森県浪岡町 浪岡城跡  
南部＝城＋館＋館・・・＝「〇〇城」 例：福島県三春町 三春城跡  
九州南部＝城＋城＋城・・・＝「〇〇城」 例：鹿児島県知覧町 知覧城跡

※東北地方では「〇〇城」の呼称は、地域権力の当主のみに限定される、当知行権の象徴  
北海道南部では「〇〇城」の呼称が見られない→北海道上ノ国町 勝山館跡

「城＝地域権力の当主←→館＝家臣団の居所を示す。城優位の原則」

※列島中央部＝館は当主の居住域の呼称に限定→正式な呼称としては使用禁止

御所：正当な公権力＝守護権力の呼称→「〇〇館」「〇〇御所」

「屋形」呼称の使用は室町將軍家の許可承認が必要

例：武田館・大内館・大友館

「館・屋形＝守護権力に限定←→城＝当主と家臣団の区別無し : 館優位の原則」

※九州南部では城と館の呼称の区別が消滅している？→「城優位の原則」

会津高田地方では、居館を構える領主が優位  
平地居館跡も〇〇〇城と呼ぶ→城優位の原則 →館と城の呼称の区分が不明確

- ①戦国時代には明確に区分されていたが、近世に不明確化した。
- ②戦国時代でも不明確であった→輩名氏権力の集権化が未成熟であった。

### 三. 会津盆地・沖積地の方形城館跡－ムラの御堂の風景－

#### 1. 高野町・平塚館跡の薬師堂

- 7軒の集落で、ムラ外れの薬師堂を維持している。
- 現在も大晦日に薬師堂への参籠を続けている。
- 薬師堂境内地の一面は、集落の共同墓地になっている。
- 集落全体が、平塚館跡の中に入っている。
- 方形居館＝中世の集落＝10軒程度の規模
- 薬師堂＝村殿領主（経営）と領民（メンテナンス）の共同維持。  
大晦日の参籠は中世以来の伝統行事。領主の御堂は村人を排除しない。
- 領主が没落－伊達政宗の会津併合－後には、村人による共同管理に移った。

2. 館馬町・対馬館の「館の御薬師様」

- 現在は、地域の児童公園、ゲートボール場（薬師公園）と、蒲生秀行の墓地、寺院の墓地・境内地になっている。
- 薬師堂の管理は、旧来の地元住民の10数軒で行っている。
- 9月にはこの児童公園で盆踊りが行われる。
- 館の御薬師様は、子供の守り本尊として、現在も信仰を集めている。
- 薬師堂を管理維持している地元住民＝10数軒が中世・戦国期のムラ。
  - 村殿領主が没落した後は、村人が御堂の管理維持を継承し、共同体所有になる。
  - このことは、平塚館と同様に領主の御堂は、村人との共同維持であったことの反映。
  - 領主が存在しなくなっても、御堂は地域の聖地・霊場として、地域住民の心の中で生き続ける。

3. 会津本郷町・螺良岡の薬師如来像

- 螺良岡集落の奥の村外れにある薬師堂は、中世館跡に存在する（現地踏査で確認）。
- この境内地にはかつて小学校が置かれていた。
- 御堂の薬師如来像は鎌倉期にまで遡る。
- 館跡は、御堂と共に、住民・村民の共同体所有になる。

四. 会津三十三観音霊場と方形居館跡

1. 村殿領主の御堂からムラの御堂へ

会津三十三観音堂と方形居館跡の対象表

※戦国期以前からの霊場・仏閣 ◎一致 ○付近に居館跡が存在

△付近に居館跡が存在する可能性が高い ×付近に居館跡の存在の可能性が低い

	名 称	所在地	居館跡との関係
一番	大木十一面観音	塩川町字大木	△
二番	松野 千手観音	喜多方市慶徳町松野	◎ 松野館
三番	綾金十一面観音	〃 豊川町綾金	△
四番	高吉 〃	〃 高吉	△
五番	熱塩 千手観音	熱塩加納村字熱塩	※ 示現寺
六番	勝 十一面観音	喜多方市関柴町勝	◎ 下勝館
七番	熊倉 千手観音	〃 熊倉町	○
八番	竹屋如意輪観音	塩川町大字中屋字竹屋	△
九番	遠田 千手観音	〃 大字遠田字谷地中	◎ 下遠田館
十番	勝常十一面観音	湯川村勝常	△ ※勝常寺
十一番	東原 馬頭観音	会津坂下町金上	◎ 金上館
十二番	田村山 聖観音	北会津村田村山	◎ 田村山館
十三番	館 聖観音	〃 館	◎ 未記載・現地確認
十四番	下荒井 聖観音	〃 下荒井	◎ 下荒居館
十五番	高瀬十一面観音	会津若松市神指町	△神指城築城で消滅か
十六番	平沢 聖観音	〃 町北町	◎ 平沢館
十七番	中ノ明 聖観音	〃 〃	◎ 中ノ明館
十八番	滝沢 聖観音	〃 一箕町	◎ 石部館
十九番	石塚 聖観音	〃 川原町	◎ 石塚館
二十番	御山 聖観音	〃 門田町青木	◎ 尾山館
二一番	左下り 聖観音	会津本郷町字左下り	◎ 大石館
二二番	相川十一面観音	〃 字相川	◎ 相川館
二三番	高倉十一面観音	〃 字高倉	△? 不明
二四番	関山十一面観音	〃 字関山	◎ 上小松館

二五番	領家十一面観音	会津高田町字領家	○ 宿立で移動か
二六番	富岡十一面観音	〃 字富岡	○ 宿立で移動か
二七番	大岩 聖観音	〃 大字吉田	◎ 青館の山城か
二八番	高田十一面観音	〃 中町	○ 宿立で移動か
二九番	雀林十一面観音	〃 字雀林	○ ※法用寺
三十番	中田十一面観音	新鶴村米田	◎ 中田館
三一番	塔寺 千手観音	会津坂下町大字塔寺	◎ 経塚古墳の発掘で堀跡を検出
三二番	青津 聖観音	〃 字青津	◎ 生江館
三三番	御池 聖観音	〃 字御池	△ 註

註一付近一帯の古くからの用水源の湧水地。集落も中世に遡る

■ 方形居館跡（一部山城跡を含む）と一致のケース	=◎ 19 / 33
	(58%)
〃 付近に存在するケース	=○ 5 / 33
	(15%)
付近に方形居館跡が存在する可能性が高いケース	=△ 8 / 33
	(24%)
小計	: 32 / 33
	(97%)

※五番一熱塩千手観音・示現寺の場合は、古代・中世以来の別格の在地霊場である。△十番一勝常十一面観音・勝常寺は示現寺よりも古い寺院であるが、同集落は旧勝常寺村の中心集落なので、中世居館が存在した可能性が高いと考えられる。

■ 方形居館跡と関連性が想定される事例△をも含めると、会津三十三観音霊場の内、32件（97%）が該当する。不確実性の高い△を除外しても24/33で、73%という高い確率が得られる。

■ 以上の検討結果から、会津三十三観音霊場は、○中世の方形居館・村殿領主と集落との共同維持の御堂から継続していること、○ムラの共同体所有・運営が本来の形態であったこと、を復元することが出来る。

## 2. 近世の観音霊場の成立

近世は「霊場と巡礼の時代」とも言われる。通説的な「寛永20年（1643）に、保科正之が33才で会津に入部した時に、三十三観音霊場を見立てた」と言う伝承は、あるいは正しいのかも知れない。しかし、この伝承には致命的な設問の欠陥がある一観音霊場を見立てるには、既にその地に根付いた、誰でもが得心する霊場・聖地が存在していなければならない。その霊場・聖地とは一体何であったのか？

天正17年（1589）6月に中世以来の戦国大名・輩名氏が没落した。これ以降、伊達一蒲生一上杉氏と支配者がめまぐるしく交替する中で、会津盆地の村殿領主・方形居館の世界は消滅した。村殿領主がその居館から追われ、武士身分を剥奪されても、領主と村人が共同で築きあげたムラの安寧・安全維持装置としての「ムラの御堂」の信仰は、地域の民衆の心の中では生き続けていた。

中世の村々は互いに自立しながら、緩やかな連合体を形成していた。この連合と地域の共同利害の調整と実現のための機能として、輩名の権力は存立していた。無論、近世に入ってもムラの自立と自治の機能は形を変えても維持され、藩権力はその上乘ってこそ機能し得た、と言っても過言ではない。しかし、ムラの自立と自検断の機能・象徴であった村殿領主は追放され、あるいは武士身分を剥奪された郷頭・肝煎／百姓身分に甘んじなければならなかった。

村殿領主と村人が共に維持運営していた方形居館の御堂、その後身であるムラの御堂が三十三観音霊場に編成されて行く過程は、信仰と言う形を借りた、中世の自立と自尊心の復活と回顧ではなかったのか。

### 3. 在地霊場と城館

伊藤清郎氏の『霊山と信仰の世界』（吉川弘文館）の研究成果から

- ・ 霊場－古道－城館の重複・近接→近世の農地開発＝沖積地・氾濫原＝大規模堤防・灌漑工事  
山裾に蝟集する中世城館→中世の開発＝山裾扇状地＝中小河川による灌漑  
霊場・霊山→水分神・請雨・農事暦・作神信仰
- ・ 霊場・霊山を借景・背景にする城館＝農業神の庇護、五穀豊饒の確約
- ・ 在地修験と領主＝作神・水神・風神のコントロール／領主の勸農義務  
→領主権力→修験・霊場への保護→「順雨調風」→初穂料＝年貢・役負担

#### 領主の義務

- ・ 勸農－満作の義務と保障／「順雨調風」の確保→失敗＝神仏の加護を失った結果  
／領主の請雨義務  
＝年貢・役の減免  
＝領主の正統性の揺らぎ
- ・ 在地徳政－慣習法としての在地徳政－徳政の海に浮かぶ中世社会  
領主の代替わり徳政、天災・疫病・天変地異に伴う徳政要求
- ・ 安寧の保障／弓矢の徳政＝安全保障契約を履行出来なかった領主  
＝領土侵犯を防げなかった領主＝年貢・役の減免  
／領民の城館内への収容  
／神仏の加護の確保
- ・ 領民と領主／年貢負担者の論理←→課役者の論理：領民は納得出来ない負担は拒絶できる  
／領民との身近なつきあい：繰り返される年中行事  
：年貢完納→領主の振る舞い  
／人気の正統性：領主のパフォーマンス

#### 在地霊場論と中世領主論

霊場と聖地を形成し、霊験あらたかな御仏を持ち、御堂を経営することは、現世の安穩・安全を保障し、来世への成仏を約束するための、欠くことの出来ない領主の務め、義務であった。霊場は、五穀を稔らせ、雨を降らせ、疫病を防ぐ、目に見える装置であった。これらが循環するように維持されてこそ、領民は税と役を負担した。安心立命一心の世界の把握こそが、究極の中世領主論。

## 五. 向羽黒城の成立

### 1. 在地霊場としての向羽黒・岩崎山→四章3. 在地霊場と城館

黒川館と向羽黒山城のセット関係。

黒川館は拡張を繰り返すが、向羽黒山城の拡張は微少→市庭の空間機能  
会津守護職を主張する葦名氏の正統性→新宮・北田氏滅亡後は、会津地方には敵対者・ライバルは存在しない→他者からの攻撃を想定していない黒川館と町  
→伝統的な守護大名に共通する館と町→守護町の形態  
→統治権の象徴としての向羽黒山城の拡張は微少

### 2. 方形館城時代から山城の時代へ→戦国の世の始まり

十五世紀前半(1420～30年代)→葦名氏の会津統一

1420年、北方新宮氏の追放、新宮城落城、1430年新宮氏滅亡

→平城・方形館城時代の終了

十五世紀後半→会津統一権力の象徴＝在地霊場を取り込んだ向羽黒築城

→山城の時代へ

### 3. 向羽黒城下町・三日町の否定

向羽黒城の大手口が変化する→葦名段階＝三日町口

→蒲生・上杉段階＝くるみ坂口・大川口

三日町→太子堂を中心とする定期市の開催地＝市庭の空間＝在地霊場の麓

→葦名氏の家臣団は在村。城下集住していない→城下町は未成立

4. 若松城と向羽黒城の拡張整備は連動する→親子・兄弟関係の両城(参考図参照)

城郭は拡張整備時点では防御力が激減する→①向羽黒城をはじめに拡張整備する  
向羽黒城が若松城をバックアップする →②若松城を拡張整備する

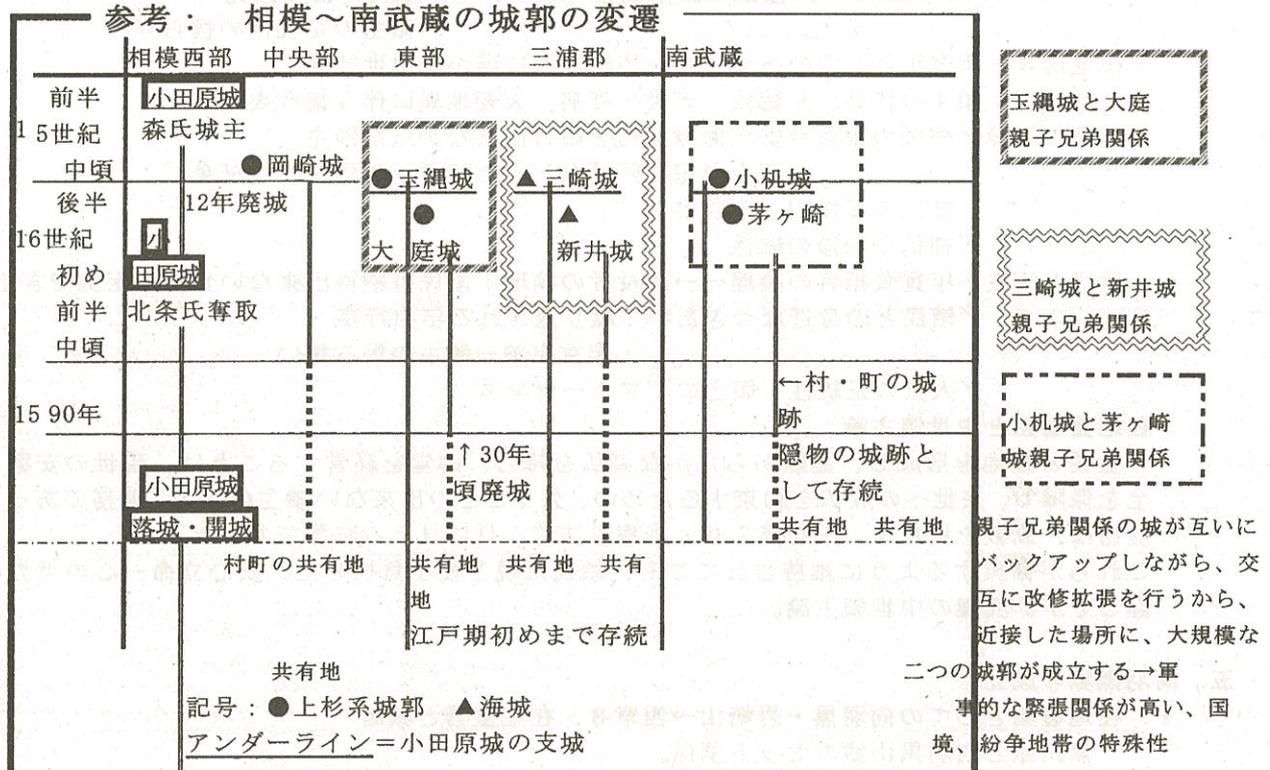
①②の連動する城郭整備を繰り返す→近接する場所に存在する平城と山城のセット

③上杉段階→神指城築城とリンクして向羽黒城が整備された可能性

→要検討。神指城築城に対面する側に大手口を付け替える？

下の三つの囲みケイの地域が、15世紀末～16世紀初頭頃、

早雲段階の上杉←→早雲の紛争地域=早雲方の防衛ライン



〈参考文献〉

- 石田明夫 『会津高田町史』第二巻一「城館跡」
- 伊藤清郎 『霊山と信仰の世界』(吉川弘文館)
- 伊藤正義 『城破りの考古学』(吉川弘文館)
- 落合延孝 『猫絵の殿様一領主のフオクロア』(吉川弘文館)
- 笠松宏至 『徳政』(岩波新書)
- 勝俣鎮夫 『一揆』(岩波新書) 『戦国時代論』(岩波書店)
- 黒田基樹 『百姓から見た戦国大名』(ちくま新書)
- 千田嘉博・小島道裕・前川要 『城館調査ハンドブック』(新人物往来社)
- 藤木久志 『豊臣平和令と戦国社会』(東京大学出版会) 『戦国の作法』(平凡社選書)
- 『戦国を見る目』(校倉書房) 『雑兵たちの戦場』(朝日新聞社)
- 『村と領主の戦国世界』(東京大学出版会) 『戦国の村を行く』(朝日選書)
- 二木謙一 『中世武家儀礼の研究』(吉川弘文館)
- 山室恭子 『黄金太閤』(中公新書) 『群雄創世紀』(朝日新聞社)

表4 会津高田町城館跡・石高・戸数・人口比較表

種別	城館名	集落名	石高(石)		戸数(戸)		人口(人)		城館の支配形態	城館主
			文禄三文献1	寛文五文献2	寛文五文献2	文化六文献3	寛文五文献2	明治四文献4		
■	高田城	高田村	2,285余	2,353余	306		1,837		拠点城	渋川義清刑部太輔
		境新田		55余	5		24	56		
■	安田館	安田村	451余	525余	47		243	252		武藤築後
		佐布川村		248余	19		129	238		
■	永井野館	永井野村	742余				87	836		岡部宗四郎憲基
■	上戸原館	上戸原村	174余				20	128		桜井丹波
■	杉屋城	屋敷村		172余	23		145		拠点城	
		杉内村	324余				21	120		松本図書・小島備中
		荻窪村	333余				32	202		
▲	松沢城	松沢村	89余				31	218		
■	松岸館	松岸村	306余				53	342		神志願春 松本治郎
		上杉原村	490余				17	100	拠点城	
		下杉原村					24	157		
▲	赤館城	岩淵村	94余				12	58		畠田平十郎政村
		笑作村	153余				20	111		
▲	池端城	池端村	249余				26	134		
■	長岡館	長岡館村	325余				30	183		木村隼人
		北村	309余				27	220		
▲	無量城	無量村	476余				55	243		不明
■	小川館	小川村	122余	240余			15	84		佐藤弾正道秋
		小川窪村	122余				37	186		穴沢越中守後家
▲	寺入城	寺入村	428余				76	374		
■	西勝城	西勝村	714余	715余	66	47	369	270	拠点城	渋川安芸守義春 佐瀬若狭
		竹原村	318余	318余	34	24	172	124		
		富岡村	312余	321余	57	30	300	149		
		領家村	581余				62	225		
■	上中川館	上中川村	375余	503余	42	27	186	128		中川五郎秀景 佐藤右衛門
■	藤田館・城	藤田村	549余							栗村弾正
■	沖ノ館	沖ノ村	321余							沖兵部太輔 鶴浦入道
▲	市野城	市野村	297余				55	224	拠点城	宇田川民部

(4-1)

種別	城館名	集落名	石高(石)		戸数(戸)		人口(人)		城館の支配形態	城館主
			文禄三文献1	寛文五文献2	寛文五文献2	文化六文献3	寛文五文献2	明治四文献4		
■	玉井館	橋爪村	1,398余					82	449	玉井若狭・佐久新三郎 秀重将監
■	中川館	下中川村	658余					31	270	中川源藏三浦光政
		新堀村	148余					11	67	
■	赤留館・城	赤留村	505余					104	615	不明
▲	八木沢館・城	八木沢村	960余					129	707	五反田五郎左エ門
▲	雀林館・城	雀林村	483余	643余	99		96	463	432	大楽新五郎
■	寺崎館	寺崎村	403余	474余	62		40	285	196	池田治郎俊久
▲	尾岐窪城	尾岐窪村	322余					33	189	不明
		藤江村	22余					2	30	
▲	仁王城	仁王村	85余	95余				13	77	不明
		堀内村	79余					10	68	
■	小山館・城	小山村	101余					168	11	坂内三河守憲政
		大岩村	61余					8	54	金田右京常次
▲	青城	青村	179余					39	210	
	不明	蛇喰村	89余					5	11	不明
		菅沼村	45余					4	22	
	不明	海老山村	52余					6	36	不明
■	下館	魚淵村	109余					17	107	不明
▲	下館城	大室村	49余					10	41	
		沼平村	25余					8	50	
		藤江村	22余					2	30	
■	落合館・城	落合村	91余					15	78	上野土佐
		観音堂村	73余					25	98	
▲	牧内城	牧内村	36余					7	34	広沢善義 上野土佐
	不明	下谷ヶ地村	48余					16	114	不明
		中在家村	23余					8	46	
	谷ヶ地城	中村	9余					3	18	本多平藏
▲	入谷ヶ地城	入谷ヶ地村	16余					23	64	公家入佐工門
■	水沢館・城	東尾枝村	1,325余					168	918	拠点城 長峯越中 長嶺三郎政澄 佐藤大藏丞吉近 河島右京 川島伊豫 不明
▲	遅沢城									
▲	勝負沢城									
▲	入松和田城									
▲	戦場城									
▲	結能城									

(4-2)

- 文献1. 『蒲生氏郷 高目録帳』 文禄三年(1594年)  
 2. 『高田組郷村方改帳』 寛文五年(1665)  
 3. 『新編会津風土記』 文化六年(1809)  
 4. 『人員録』 明治四年(1871)

■居館(城)  
 ▲山城

山城の立地位置の分類

- I 独立山頂タイプ  
独立山頂部に位置するもの
- II 中腹タイプ  
山頂より下の中腹に中心の平場が位置し、山頂部は物見としたもの
- III 尾根切断タイプ  
背後に、山頂部より高い山があるもので、土橋と堀切により区画されるもの



I 独立山頂タイプ



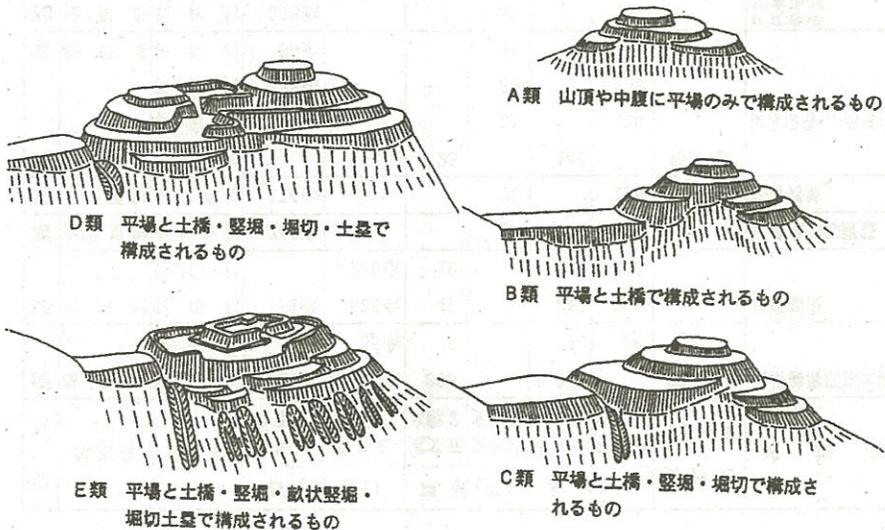
II 中腹タイプ

- IIa 山頂に物見台のあるもの
- IIb 山頂に物見台がないもの



III 尾根切断タイプ

遺構形態による分類



A類 山頂や中腹に平場のみで構成されるもの

B類 平場と土橋で構成されるもの

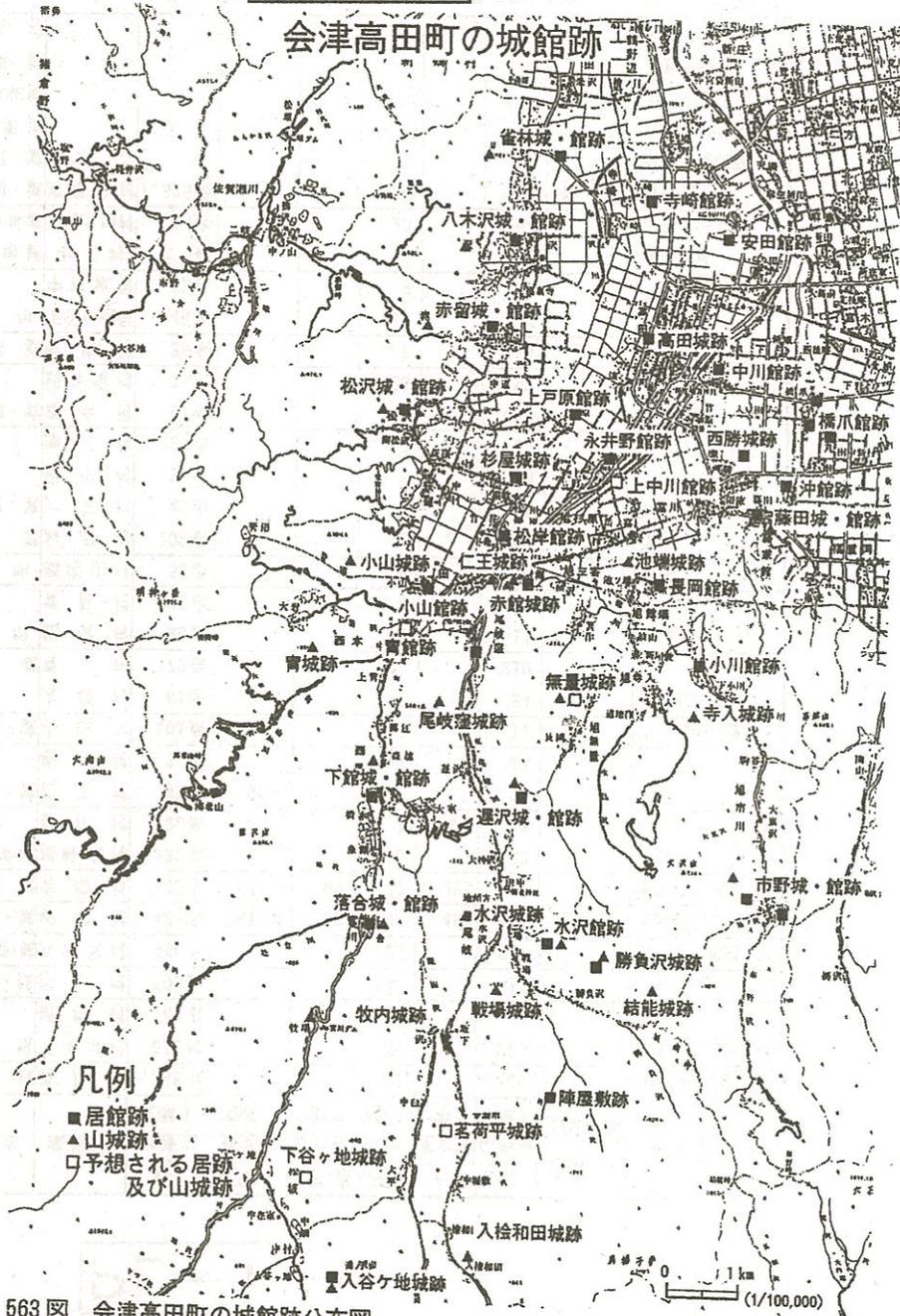
C類 平場と土橋・堅堀・堀切で構成されるもの

D類 平場と土橋・堅堀・堀切・土壘で構成されるもの

E類 平場と土橋・堅堀・敵状堅堀・堀切土壘で構成されるもの

562 図 山城分類図

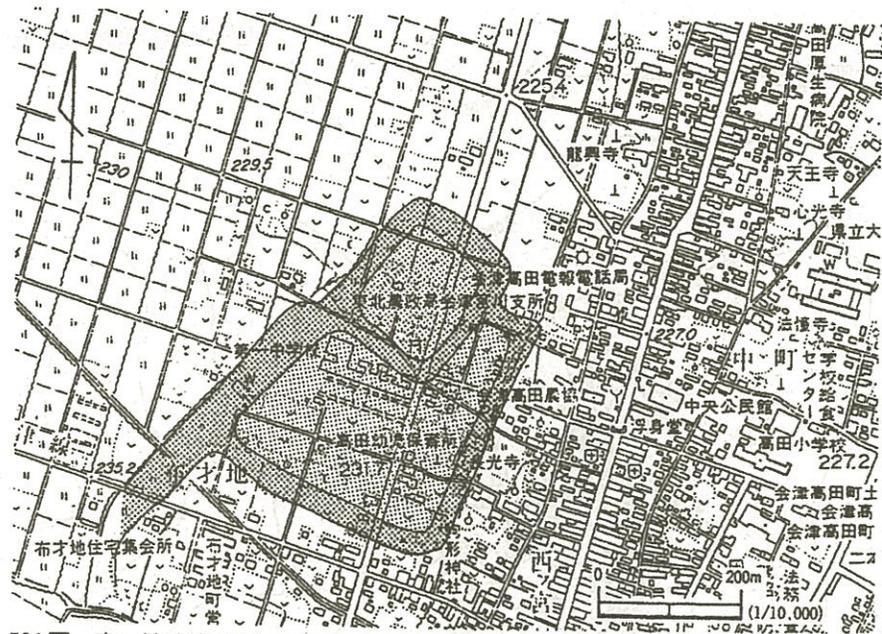
会津高田町の城館跡



凡例

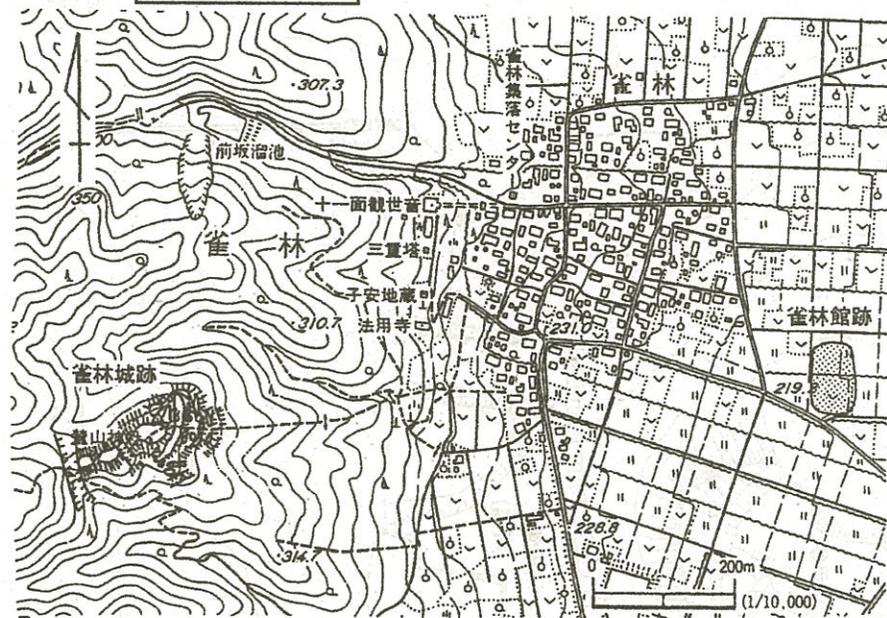
- 居館跡
- ▲ 山城跡
- 予想される居館及び山城跡

563 図 会津高田町の城館跡分布図

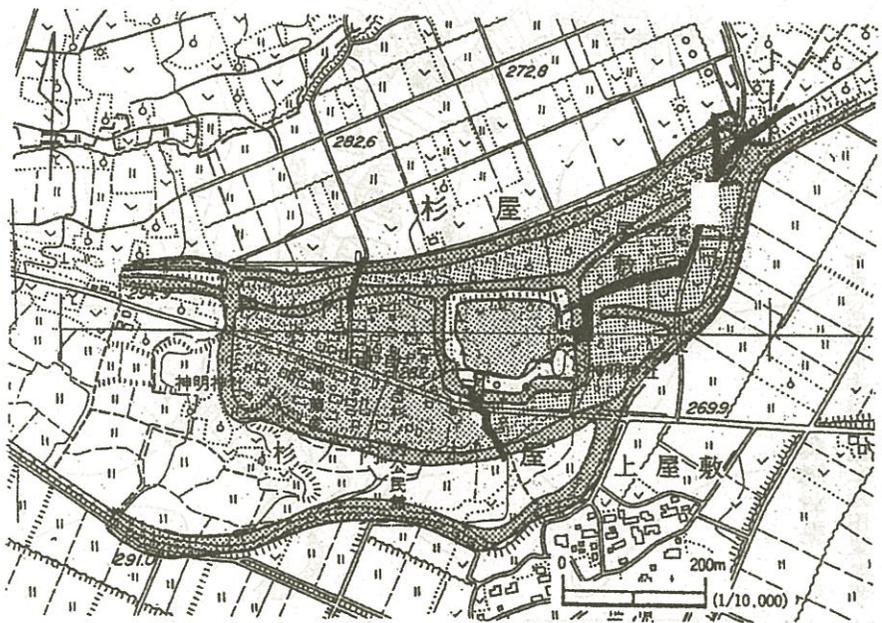


564 高田城跡位置図

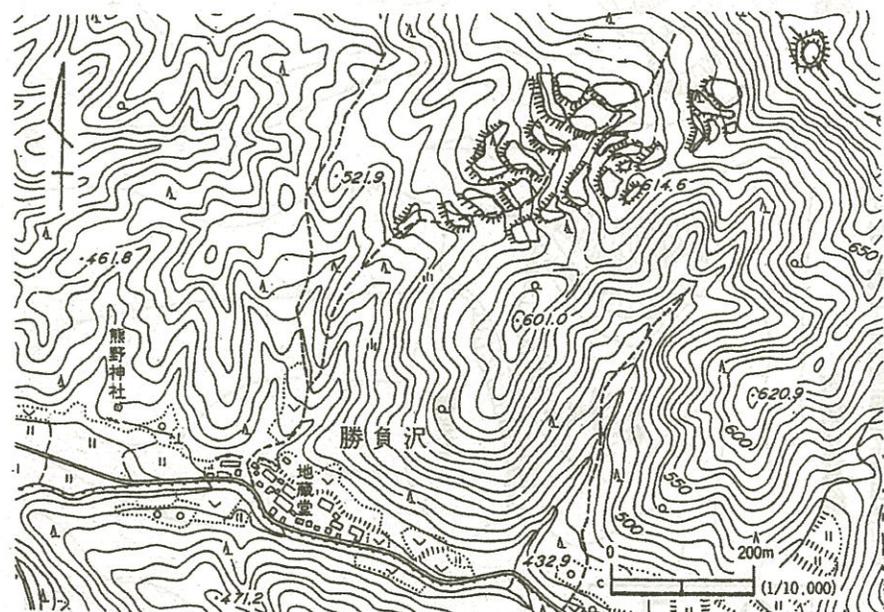
PL-4



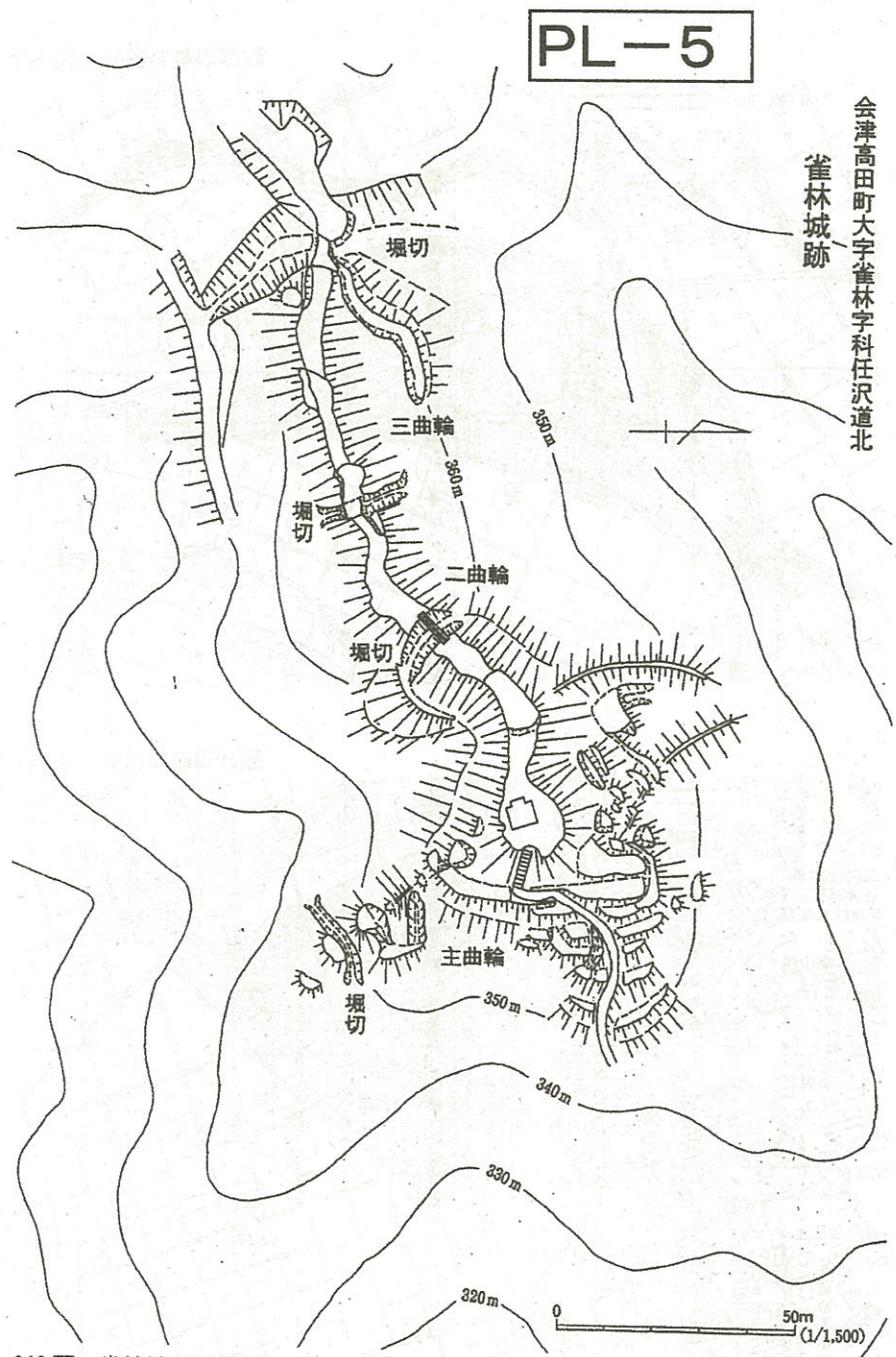
645 雀林城跡・館跡位置図



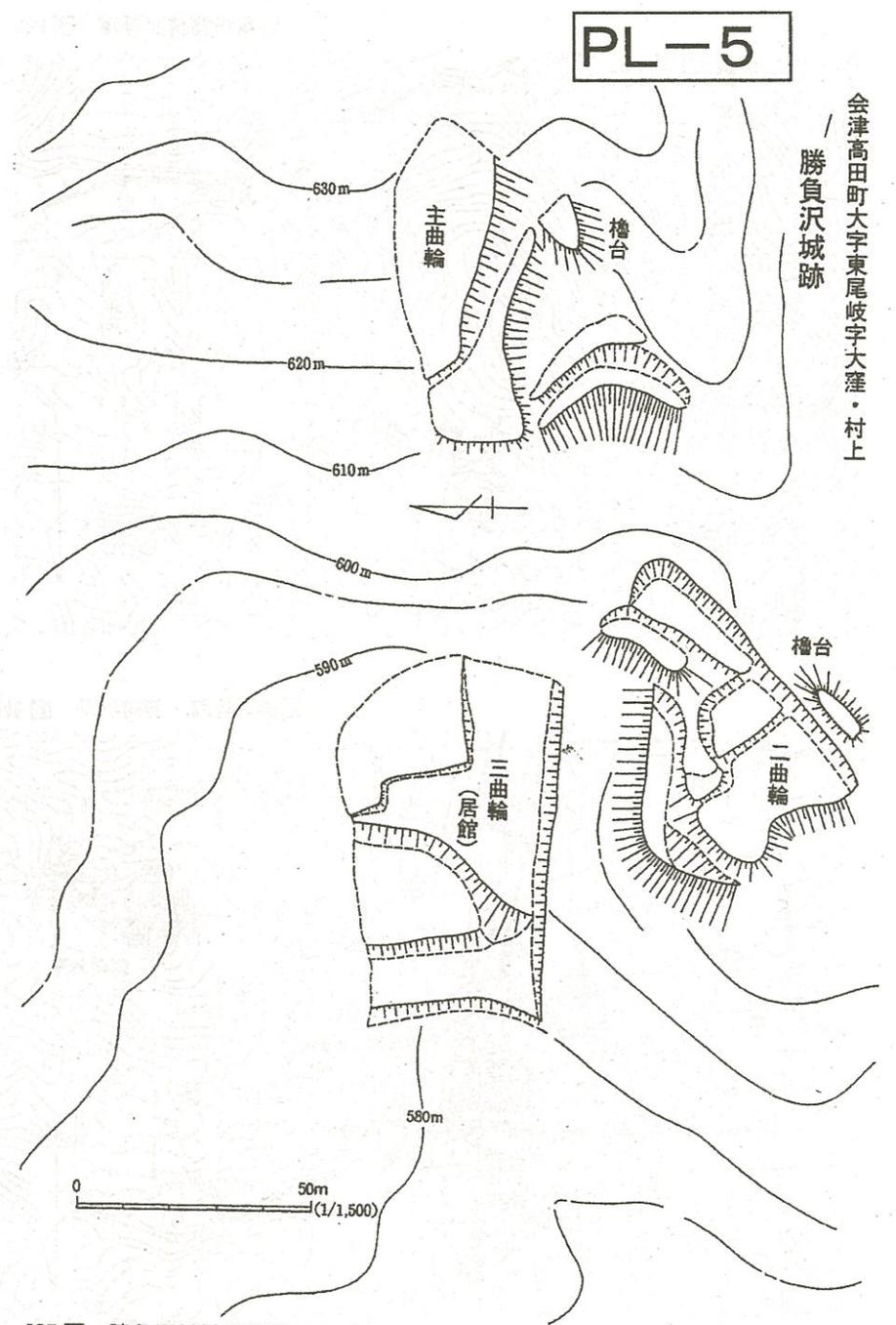
580 杉屋城跡位置図



684 勝負沢城跡位置図



646 图 雀林城跡実測図



685 图 勝負沢城跡実測図